

# 清末上海の日本語新聞の世界（2）

## ―『上海新報』（一九〇三年―一九〇四年）の創刊号を中心に

孫 安 石

### 一．問題提起

神奈川大学の非文字資料研究センターが発行する『年報 非文字資料研究』第十号（二〇一四年三月）に拙文「清末上海の日本語新聞（一八九〇年―一八九一年）の世界―活版印刷と三井物産、そしてメディア史の観点から」を発表した。その時筆者は、「中国のその他の開港場や日本租界で発行された日本・日本人関連の新聞雑誌を明治・大正・昭和に至るまで網羅し、全体の見取り図を提示できる研究が待ち遠しい」と記した<sup>(1)</sup>。

その後、中国で発行された日本語新聞に関する研究はなかなか進まずにいたが、今回山口建治先生の定年退職を記念する特集号が組まれたことになったので、二〇一三年五月に韓国の国民大学のシンポジウムで口頭報告した原稿を元に、日清戦争と義和団事件後の上海で発行された『上海新報』（一九〇三年―一九〇四年、週刊紙）、とくに創刊号（一九〇三年十二月二十六日）と「上海新報付録」を取り上げ、『上海新報』における時代認識や上

海の印刷・出版状況、日本人の海外移民ネットワーク、上海の日本人婦女問題に関する言説を紹介することにした。

ちなみに、本稿では東京大学近代日本法政史料センター「井手三郎」文庫が所蔵する版本の『上海新報』を用いることにする。『上海新報』創刊号第四面の記載によれば「発行兼編集人 杉尾勝三、印刷人 和知小次郎、印刷所 中西印刷書局」とあり、発行所は「上海新報社」とされているが、その詳細は不明である。ただ、編集を担当した杉尾勝三については、姚紅「芥川龍之介と上海における日本語新聞」のなかで、「(前略) もう一つは上海総領事小田切万寿之助の勧めによって、一九〇三年十二月二十六日に杉尾勝三が創刊し、竹川藤太郎が編集した週刊紙である。翌年三月一日発行の十一号をもって『上海日報』と改題して六十九号まで刊行されたが、東亜同文会の井手三郎に買取られ、同年七月一日から日刊紙となった」という記述があり、その名前が確認できる。以下、『上海新報』の引用にあたっては片仮名を平仮名に、旧字を新字にしたほか、句読点を補ったところがある。

## 二. 『上海新報』の創刊号と日本

それではここで『上海新報』の創刊号に掲載された「発刊之辞」を通して、上海にいた日本人が抱いた当時の時代認識というものを垣間見ることにしたい(「図1」を参照)。



【図1】『上海新報』の創刊号

(出典：『上海新報』の創刊号、一面、部分、東京大学近代日本法政史料センター所蔵)

「(前略) 列国の視線は東洋に攢まれり、東洋の問題は支那に集まれり。吾人は東洋に国す(ママ)と雖も自家の問題を他人に解釈せらるべき境涯をば、已に業に脱却して、列国と共に清国の前途に横はれる、幾多の未決問題を解釈すべき位地に立てり。否歴史上及地理上の関係より、少くとも列国人の前列に立を進まざるべからざる責務を有せり。而かも悲む我邦人は欧米列国人の為に機先を制せられて、毎に常に其後へに瞠若たるを」<sup>③</sup>  
 (後略)「

この引用で分かるように、当時の日本人にとって最も大きな危機意識は、欧米列国の中国進出がすでに開始されているのに対して、日本が後れをとっている、というものであった。

「(前略) 千百九十五年日清戦争の終局馬関条約に於て、諸器械輸入の条項を明確に規定せしより、絹糸綿糸の紡績及幾多の諸工場忽然上海に現出せり。而も是れ我邦人の興る所に非ずして、其条約の惠澤均霑せし欧米人の経営に係れり。且つ彼の条約に依りて、蘇杭州及長江の上流に、幾個の市場を解放せしめたり。而も其利に浴するものは多くは欧米人にして、我居留地の如きは、所在の経営に係る、二三汽船会社が長江航路に一指を染め、又上海に於て紡績工場を経始し、大治し鉄礦を採掘する等、多少人の耳目を惹くものあるも、猶未だ言う足らず、(後略)「

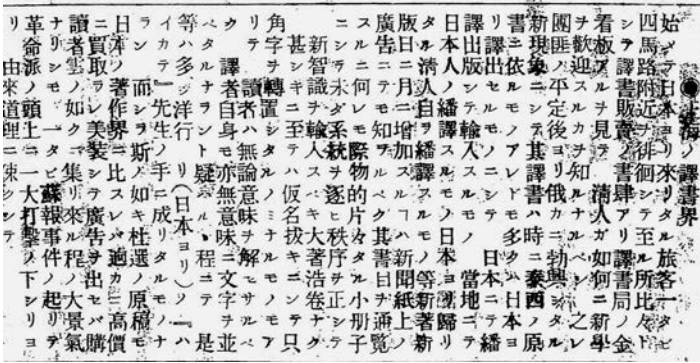
日清戦争で勝利し、台湾を割譲し、福建省において若干の特権を確保したとは言え、ドイツが膠州湾租借地を設け、イギリスが威海に要塞を築き、ロシアが旅順と大連を始め満州全域への勢力拡大を図るなか、日本は、僅かに上海で幾つかの紡績工場を経営しているのみで、鉄道敷設の権利一つも獲得していないという現状を嘆いていることが良くわかる。

欧米に後れた日本という認識と焦りは、別段、政治や経済に限ったものではなかった。例えば、清国の海関（税関）の全権を握っているイギリスのロバート・ハートの勢力にしても、欧米の宣教師の勢力を見た時と同じことが指摘できるとし、次のように続ける。

「（前略）若は夫れ清国内に於て、英語を会得する者十五万人ありとすれば、魯語を解する者十万人、獨語佛語の行はるる、少なくとも三四万人あるべしと思わるる間に我が日本語の行はるる範圍、果して幾何ぞや（後略）」  
 以上のような時代認識を背景に『上海新報』は、日本の中国進出の拠点になる場所として、また清国問題のすべては経済問題に通じることから中国の国内の十八省の経済を左右する長江と上海に注目することを闡明し、『上海新報』発行の意義を次のように高々と宣言する。

「吾人豈敢を先覚者を以て任して同胞諸君を指導すと爾か云わんや。只諸君の惰眠を警むべき枕頭に置かる自覚時計たれば可なり。諸君の身边に来る氣圧の高低を予報すべき晴雨計たれば可なり。諸君の意志を交換すべき電話器たれば可なり。吾人は諸君の爲めに利用せらるべき一種の器機たるに甘んじ、諸君の爲めに何等か貢献する所あるを以て足れりとする（傍線は筆者によるもの）」

ここに、上海に居留する日本人のための「目覚まし時計」であり、「晴雨計」であり、「電話器」としての役割



〔図2〕「上海の譯書界」の記事

(出典：『上海新報』の創刊号、二面、部分、東京大学近代日本法政史料センター所蔵)

を担うことを約束する『上海新報』が上海でうぶ声を上げたのである。

### 三. 上海と日本人の印刷出版

清末の上海で日本人が活字印刷の販路を開拓したのは明治前? 期の一八八〇年代に始まる。東京築地活版印刷製造所などが積極的に進出を展開し、一八八三年にはすでに「上海出張修文館」という出張所が設けられたことについては、すでに拙稿の中でも指摘した通りである。<sup>(4)</sup>

そこから二十年後の上海の印刷と出版事情について『上海新報』の記事「上海の譯書界」は、その現状を次のように伝えている(以下、同じ。〔図2〕を参照)。

「始めて日本より来りたる旅客一たび四馬路付近を徘徊して至る所、比々として訳書販売の書肆あり、訳書局の金看板あるを見て、清人が如何に新学を歓迎するかを知るなるべし。之れ団匪の平定後より俄かに勃興したる新現象にして、其訳書は時に泰西の原書に依るものあれども、多くは日本より訳出せるものにして、日本にて繕

訳出版して輸入するもの、当地にて日本人の繙訳するもの、日本より帰りたる清人自ら繙訳するもの等、新著新版日に月に増加する事は新聞紙上の広告にても知らるべく（後略）<sup>(5)</sup>」

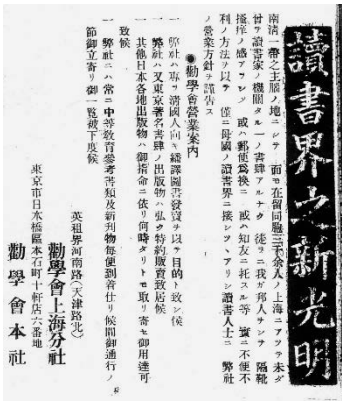
しかし、新しい学問を歓迎する中国では、まだ新知識が体系的に紹介されておらず、読者は言うまでもなく、翻訳者自身も意味が分からない文字を並べることが大いに問題であった。またその多くが日本から帰国した「ハイカラ」先生の手によって刊行されるものである事実に厳しい目を向けることを、『上海新報』は忘れなかった。

また、もう一つ中国での印刷出版において大きな問題になるのは、いわゆる新学問が「革命派」を意味することに繋がりがかねない、という危惧であった。とくに、一九〇二年に上海で起きた「蘇報事件」は上海の印刷出版界を大きく萎縮させた事件であったが、『上海新報』は記事「蘇報事件」を掲載し、『革命軍』を著した鄒容と章炳麟が清国の国憲を紊乱させたという嫌疑を掛けられ、裁判が行われていることを詳細に伝え、次のように述べている。<sup>(6)</sup>

「（前略）聯関的感情の強き清人は日本と新学と云うが如き聯感（ママ）を以て偏に自家の安危を思量し、新学は革命派の標榜する所なり近寄るべからず。訳書を読めば革命派の余党と疑はれんと危惧を懐きに至り、読者の数頓に減じて、半年前迄の大景氣に引換へ、昨今は何れの書肆も不景氣を嘆息しいると云う（後略）」

しかし、このような不景氣の中でも、上海では出版印刷事業は今後の発展が望まれるとし、日本からの印刷出版業への進出を次のように紹介している。

「（前略）東京金港堂主人は去る頃より自ら当地に出張し来り、備さに作戦計量を為し遠からず当地の出版業界に花々敷打て出る苦なりと云う。又河南路に開店しつつある勸学会分社にても現状の如何に拘わらず益々勇進し



〔図3〕「讀書界之新光明」の記事  
 (出典：『上海新報』の創刊号、四面、  
 部分、東京大学近代日本法政史料セ  
 ンター所蔵)

て訳書を輸入し傍ら在留同胞の読物を供給すと云う。訳書出版(当地にて)に逸早く先鞭を着けたる作新社は更に一大飛躍を試みんとすの計画中なり。其他訳書を輸入し或は出版しつつある日本人は楽善堂、新智社、同文滬社等なり」

ここで名前がみえる「勸学会分社」は、東京に拠点を置きながら書籍の発行、販売、出版、教科書などの代理販売を手掛ける「勸学会本社」の上海分社で、『上海新報』の創刊号にも「讀書界之新光明」という広告を掲載している(〔図3〕を参照)。

それによれば、「南清一帯之主腦の地にして、而も在留同胞三千余人の上海にあつて未だ曾て読書家の機関たる一の書肆あるなく、徒らに我が邦人をして隔靴搔痒の感あらしめ、或は郵便為換に、或は知友に托する等実に不便不利の方法を以て、僅に母国の読書界に接しつつありし、読書人士に弊社の営業方針を謹告す」と述べ、営

業案内として以下の詳細を上げている。

「勸学会営業案内

- 一、弊社は、専ら清国人向き翻訳図書発売を以て目的と致し候
- 一、弊社は、又東京著名書肆の出版物は弘く特約販売致候
- 一、其他日本各地出版物は、御指命に依り何時たりとも取り寄せ御用達可致候
- 一、弊社には、常に中等教育参考書類及新刊物毎便到着仕



〔図4〕「諸印刷及文房具一切」の記事

(出典：『上海新報』の創刊号、四面、部分、東京大学近代日本法政史料センター所蔵)

り候間御通行の節御立寄り御一覽被下度候

英租界河南路（天津路北）、勸学会上海分社、東京市日本橋区  
本石町十軒店六番地、勸学会本社」

また、『上海新報』の印刷を担当した「中西印刷書局」(The  
Shanghai Printing Company)も、『上海新報』に「諸印刷及文房  
具一切」と題する広告記事を掲載している(〔図4〕を参照)。

「敝店が宏大なる規模を以て出版印刷業に従事しつつある事は  
大方諸君の己に知らるる所にして、今搬日本人諸君の為に日本片  
仮名平仮名一切の活字を準備仕り候につき御婦人方の御名刺は勿  
論、広告引札柱曆に至る迄、精巧に安直に印刷可仕候間不拘多少  
御用被仰付度候。且つ和漢洋筆墨紙より其他の文房具一切安値に  
販売仕り候間御愛顧の程偏に願上候以上。上海英租界四川路二百  
三十号 中西印刷書局啓」

印刷出版業の一大拠点として成長しつつあった状況がうかがえよう。  
以上の印刷出版に関する記事などから、上海がすでに日本人の

印刷出版業の一大拠点として成長しつつあった状況がうかがえよう。



#### 四、『上海新報』が伝える日本人の移民ネットワーク

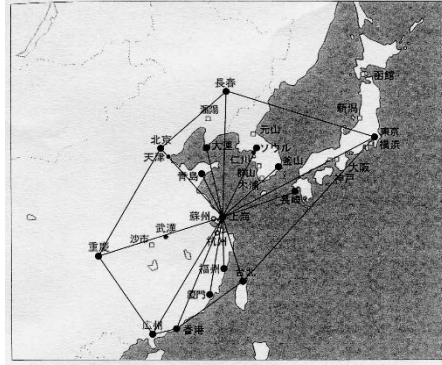
『上海新報』の創刊号には、明治初期の日本人の海外移民ネットワークを窺わせる興味深い記事「雑録 海外に移植せる邦人の五大系統」(峽畝という署名)が掲載されている。それによれば、

「現今東西両洋に散乱蕃殖せる邦人の数約十万と注せらる。而して之を五大系統に區別するを得べし。第一桑港系、第二香港系、第三上海系、第四釜山系、第五浦港系是なり。桑港系の圏内は北米合衆国、加奈太、墨其斯哥一円と中南米より更に延びて布哇及南洋諸島に亙れり。香港系は暹羅、安南、新嘉坡、孟買より印度洋沿岸一帯及豪州、比利賓諸島に及べり。上海系及南北清全体に亙り、釜山系は朝鮮一円と満州の一部に及び、浦塩系は西比利亞全部と満州及ぼして旅順大連に亙れり」

と概略を述べた後、中国における日本人の脈は、一八九〇年に上海で設立された日清貿易研究所が大きく影響力を及ぼしたとして次のように続けている。<sup>(1)</sup>

「(前略) 天津日本租界の居留人民の如きは、本国或は朝鮮より来りたる者多くして、上海の地を経たる者少しと雖も、其幹部を操縦する者は日清貿易研究所時代に曾て上海に於て書生たり、有志家たりし也。されば何れの圏内も其中央本部と直接の關係なきものあるにせよ、冥々の裡一道の光明相照し一条の気脈相通すること一条の系を以て千珠万環を串くが如し(後略)」

また、引き続き、「桑港系の圏内は書生之を開発して労働者之を継承し、上海系は書生有志家之を開拓して



【図5】『上海新報』（一八九〇年）の記事

ネットワーク図

（出典：孫安石「清末上海の日本語新聞（一八九〇年～一八九一年）の世界—活版印刷と三井物産、そしてメディア史の観点から」（神奈川大学非文字資料研究センター、『年報 非文字資料研究』第十号、二〇一四年三月、六十一頁。）

（彼の洋妾なる者亦一個の要素なりと雖も上海以外に關係すること多からず）商人其後へに追隨し、釜山系は大阪流の商人（大阪以西の人）を以て終始する者の如く。浦塩及び香港の両系は、醜業者博徒水夫を先鋒として大買小買之が殿たり（後略）」と述べ、明治維新以降の日本人の海外移民のネットワークの詳細が紹介されている。

筆者は既発表の論考の中で、『上海新報』（一八九〇年）に触れながら同紙の読者投稿欄と「支那各地通信」の発信地点を結ぶ情報ネットワークが日清戦争以前にすでに構築されていた事実について言及したことがあるが、この情報ネットワークと日本人の海外移民ネットワークは多くの点で重複するものであることは再度、吟味されてしかるべきである（〔図5〕を参照）。

## 五. 上海の日本人婦女と東本願寺

欧米列強に後れた後発組の日本が上海に進出することは容易なことではなかった。とくに、上海に滞在していた多くの日本人娼妓の問題は、欧米列強と肩を並べたい日本側にとっては国の「面子」をかけて解決すべき焦眉

の課題であつたことはすでに一八九〇年の『上海日報』でも大々的に取り上げられていた。<sup>(9)</sup>

そこから十年が経過した時点においても、日本人娼妓の問題はまだ尾を引いていたようである。たとえば、『上海新報』の記事「片々集」は次のように当時の状況を説明している。

「聞けば此頃日本人の娼妓が沢山あるそう。夫れは娼妓と云うよりも地獄とか淫売とか云うのが適當である。勿論彼等は外国人を相手にするので馬関の船頭見た様に行商(娼)する連中も少なくないと云うことが、其中には羅紗めん(ママ)をしながら、鬼の留守に洗濯と云う工合に内職として出掛ける連中も多いそうだが、日本人が段々多くなるに従て人間の層がふえて来るには困つたものだ」<sup>(10)</sup>

この記事から二十世紀以降に入つても、相当な数の日本婦人が上海で娼妓を生業にしていたことがわかるが、この娼妓問題に対して上海の日本人側が何も手を打っていなかったわけではない。例えば、日本人娼妓の問題に最も積極的に取り組んだのが東本願寺であつた。

『上海新報』創刊号の「本願寺上海別院 其二」という記事は、上海に日本人が集まる公開の場所がないことについて次のように述べる。

「二千有余の同胞の在留せる上海に於て区々の玉突場はあれども日本人の大集合をなすべき会館はあらず。三々五々の社会的会合はあれども、全体を通じて慶弔苦楽を共にすべき機関あらず。紅燈緑酒の設備はあれども慈善会あらず、嬌風会あらず、上海□同胞へ公共心の乏しきは今更ならぬ事ながら、吾人は其余りに冷淡なるに驚かざるを得ず」<sup>(11)</sup>

その上、上海の日本人の「公共」に関する場所として僅か、「義勇隊」と「本願寺」があるのみであることを

指摘し、公共のことに「冷淡」なる同胞の反省を促し、本願寺の布教活動の中心をなす開導学校の活動について次のように続ける。

〔前略〕本願寺の布教の方法に就ては、多少世人の論難を免れざるべく。又創設以来巨万の金員を費消したる丈け。夫れ文実効の挙りしや否も疑問にして、開導学校の如きも亦善美を蓋したるものとは認むること能はざるども、吾人は其事功の跡を云々せんとするにはあらず、其善美なるに向て、謝意を表せんとする者なり。嬌風会もなく、慈善会もなく、国民的教育の公立学校もなき上海に於て、只一本願寺ありて、及ばずながら社会の風教を維持し、此新日本の相続者たる児童を教育せんとする（後略）

しかし、このような本願寺の活動が皆に歓迎されたわけではない。とくに、本願寺の説教日に参加する多くの人が「洋妾輩」であったという理由で、好意を抱かない人も多く存在していた。

しかし、「洋妾輩」に対する差別に対して本願寺上海別院は痛烈に批判している。上海に一大勢力をなす、洋妾を教化することは恥かしいことではなく、むしろ喜ばしいことで、洋妾といえども同胞であることに違いはなく、「新日本」、そして、「一家族」の一員であることから「国民教育」を施すことは当然のことである、というのが本願寺上海別院の基本的な立場であった。

## おわりに―上海の日本語と方言

以上、『上海新報』の創刊号を取り上げ、当時の日本人が抱いた欧米に後れて中国に進出したという焦りから、

上海を中心に一大拠点を作るべく『上海新報』という新聞が創刊された背景を確認し、また、同時期の上海における活発な日本人の印刷・出版活動について触れることができた。また、明治の前半にかけて行われた日本人の海外移民のネットワークや上海に居留する日本人の洋妾をめぐる人々の差別に対して、「新日本」の国民の一員として彼女らを教化すべきとする本願寺の言説などを確認することができた。

日清戦争を前後し、上海で本格的に始まった日本人コミュニティの形成は依然として混乱していた。このような時代の混乱を最も敏感に反応した記事として注目したいのが、上海における日本語の方言について述べている以下の記事である。

「上海の日本人間では、何へ家は行ても（ママ）長崎言葉で持切て居るが、旭館と藤村屋では大阪言葉が行われ、東和へ行けば佐賀言葉を聞くことが出来る。そして領事館や銀行会社へ行けば東京言葉が聞ける。併し是は日本中から集た書生や官吏が、明治年間に新製した東京語であつて日本中何処へ行つても通用はするが、純粹の江戸言葉とは少し違て居る」<sup>12)</sup>

しかし、このような混乱の中でも着実に日本人コミュニティは根を下ろし、人々は異国の地、上海で着実に生業を営んでいたのも事実である。『上海新報』の創刊号に登場している日本人の旅館（東和洋行）、病院（吉益医院）、出版（勸学会）、料理屋（月廼家）、薬局（濟生堂薬局）、理髪業（松岡）、学校（日英学堂）、永島弁務所（通関）などの広告記事は、この日本人コミュニティの形成過程を如実に物語るものであるとも言えよう。

時代の変化は上海にも着実に押し寄せていたのである。

※本稿は、二〇一三年五月十日・韓国の国民大学で開催されたシンポジウムで発表された口頭原稿を加筆修正したものである。また、本稿は、(注1)に挙げた孫安石「清末上海の日本語新聞(一八九〇年～一八九一年)の世界」(神奈川大学非文字資料研究センター『年報 非文字資料研究』第十号、二〇一四年三月)を引き継ぎ、その(2)として通し番号をつけることにした。今後も継続して清末上海の日本語新聞に関連する論考を準備したい。

## 注

- (1) 孫安石「清末上海の日本語新聞(一八九〇年～一八九一年)の世界―活版印刷と三井物産、そしてメディア史の観点から」(神奈川大学非文字資料研究センター、『年報 非文字資料研究』第十号、二〇一四年三月)、四十二頁。
- (2) 姚紅「芥川龍之介と上海における日本語新聞(筑波大学比較・理論文学会、『文学研究論集』(二十八)、二〇一〇年) 八十一頁。
- (3) 「発刊之辞」(『上海新報』創刊号、一九〇三年十二月二十六日、一面)。
- (4) 注(1)の拙稿を参照。また、上海の同時期の印刷出版については、板倉雅宣『活版印刷発達史―東京築地活版製造所の果たした役割』(印刷朝陽会、二〇〇六年)、同「上海 修文書館のこと」(『タイポグラフィ学会誌05』(二〇一二年七月)を参照)。
- (5) 「上海の訳書界」(『上海新報』創刊号、一九〇三年十二月二十六日、二面)。
- (6) 「蘇報事件」(『上海新報』創刊号、一九〇三年十二月二十六日、二面)。
- (7) 映畝「雑録 海外に移植せる邦人の五大系統」(『上海新報』創刊号の「上海新報付録」、一九〇三年十二月二十六日、一面)。
- (8) 注(1)の拙稿、六十～六十一頁を参照。
- (9) 注(1)の拙稿、五十一～五十三頁を参照。

- (10) 「片々集」〔上海新報〕創刊号の「上海新報付録」、一九〇三年十二月二十六日、一面。
- (11) 「本願寺上海別院」〔上海新報〕創刊号の「上海新報付録」、一九〇三年十二月二十六日、一面。
- (12) 「片々集」〔上海新報〕創刊号の「上海新報付録」、一九〇三年十二月二十六日、二面。